

歴史研究支援ソフトウェア KuKuRI の開発

堀井 洋¹⁾ 山本晃平²⁾ 沢田史子³⁾ 林 正治¹⁾ 米田 稔²⁾ 吉田武稔¹⁾
 北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科¹⁾ 株式会社 COM-ONE²⁾
 金沢星稜大学 総合研究所³⁾

1. はじめに

これまで歴史学分野では、史料探索や史料解読・分析作業などの大部分において、研究者個人が紙メディアを基本とした所謂「手作業」により研究を行ってきた。しかし、近年、歴史を題材とした他分野との横断的研究や複数の研究者による共同研究など、歴史研究分野においても積極的な情報共有と研究情報の整理・公開が求められている。さらに、歴史学研究成果を基にした地域観光の創出などを実現する際には、研究成果を電子的に再現・利用可能な形式で蓄積できるかが非常に重要な問題となる[1]。

本研究では、歴史研究者向けの歴史研究支援ソフトウェア KuKuRI (くくり) を提案する。KuKuRI の開発により、歴史研究における電子的な研究支援環境が構築され、共通した研究ツールによる研究者間の情報共有が期待される。さらに、従来であれば、研究者各個人固有の形式で蓄積されていた研究成果を電子データとして標準形式で蓄積することが実現され、データベースによる検索利用や他分野における活用など、研究成果の情報資源としての活用が期待される。

2. 歴史研究における研究プロセスのモデル化

本ソフトウェアの開発にあたり、歴史研究における研究プロセスの分析とモデル化を試みた。モデル化に際しては、日本近世史を専門とする歴史研究者 4 名の協力の下に、課題の発見から研究成果の発表までの研究状況について調査を行い。研究プロセスを先行研究調査 (I) ・史料探索 (II) ・史料解読分析 (III) ・成果発表

(IV) の 4 つに分類した。研究プロセスモデルの概要を図 1 に示す。この研究プロセスモデルを基に情報技術適用の検討を行った結果、史料探索 (II) と史料解読分析 (III) について、ソフトウェアによる研究支援が可能であるとの結論を得た。その主な理由としては、史料探索 (II) については、手作業を中心とした研究手法では史料探索に多く時間・労力を費やしているのに対して、データベースなど既存の汎用的な情報技術を適用させることにより改善が期待できることが挙げられる。また、史料解読分析 (III) では、アノテーション付与技術や情報可視化技術の適用が可能であり、研究成果として電子データ化・蓄積が望まれる翻刻や語句解説などが本段階で多く生成されることが挙げられる。

3. 歴史研究支援ソフトウェア KuKuRI

歴史研究支援ソフトウェア KuKuRI の開発目的は、以下の 2 点である。

- 1) 情報技術による歴史研究の支援環境構築
- 2) 歴史学研究成果の収集・蓄積の実現

史料探索 (II) では、サーバー上に史料目録データベースを設置し、インターネットを介して歴史情報の検索を実現する。データベースの検索では、従来の史料名・史料番号・資料請求番号と併せて、その内容に関する意味的なキーワードによる検索を行う[2][3]。目録データベースの構築に関しては、著者らが現在取り組んでいる研究課題の 1 つであり、江戸幕末期の史料目録を対象としたデータベース化を進めてい

KuKuRI: Software for Historical Research,
 H.HORII 1), S.YAMAMOTO 2), A.SAWADA 3),
 M.HAYASHI 1), M.YONEDA 2), T.YOSHIDA 1)
 1) School of Knowledge Science, Japan Advanced Institute of
 Science and Technology
 2) COM-ONE.ltd.
 3) Kanazawa Seiryu University

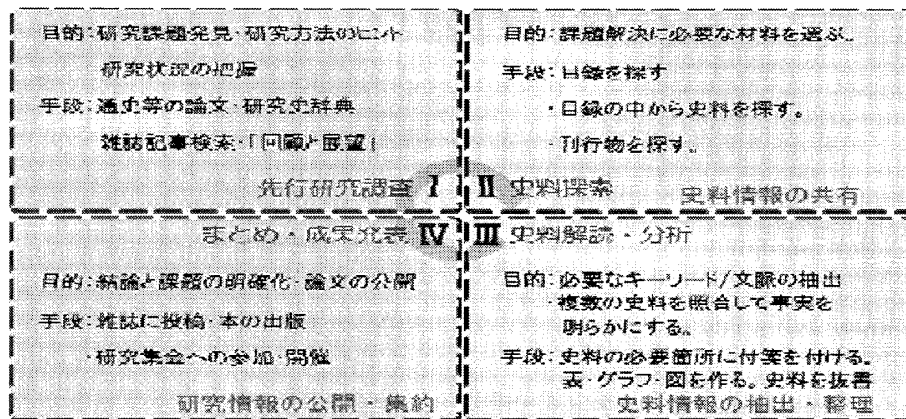


図1 歴史研究における研究プロセスモデル

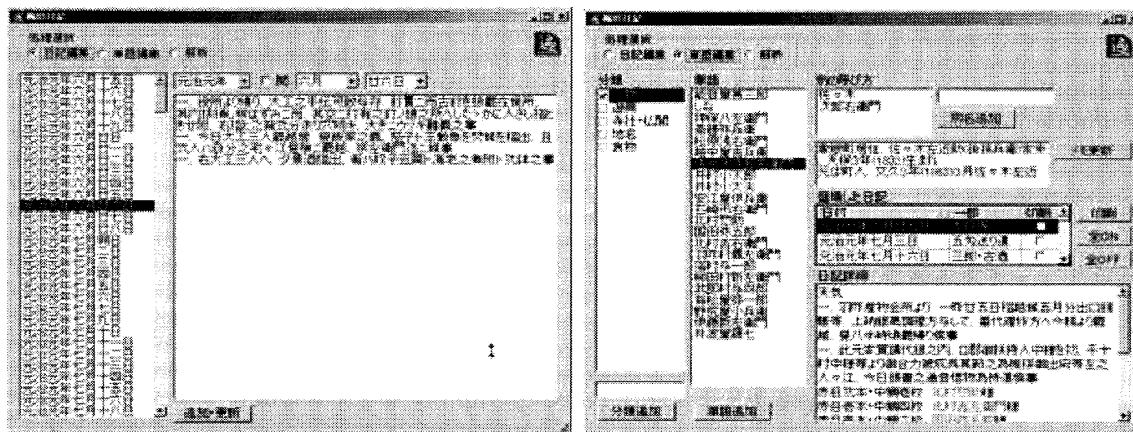


図2 歴史研究支援ソフトウェア画面
(左) 史料翻刻支援 (右) 単語解説編集

る。

史料解読分析(Ⅲ)については、図2に示すように、史料翻刻支援および単語解説編集を対象にした研究支援環境を構築した。特に、史料翻刻では人名や地名などの特定単語がどの部分にどのように出現するかが、歴史研究における興味の一つであり、単語の解説・属性の登録とそのデータを利用した全文検索による単語出現傾向の分析は、本ソフトウェアの機能として重要である。

4. まとめ

本研究では、歴史研究者向けの歴史研究支援ソフトウェア KuKuRI を提案を提案し、歴史研究分野における情報技術適用の可能性を検証した。本ソフトウェアの開発は現在進行中であり、情報技術者と歴史学研究者により構成された「遍

プロジェクト」を基礎に行われている。今後、更に開発を進め、情報技術による歴史研究とその研究成果の活用促進の実現を目指す。

参考文献

- [1] 平成17年度観光白書, 国土交通省, 2005
- [2] HEML: Historical Event Markup and Linking, <http://heml.mta.ca/heml-cocoon/>
- [3] RDF :Resource Description Framework, <http://www.w3.org/RDF/>

謝辞

本研究の一部は、平成20年度戦略的情報通信研究開発推進制度(地域ICT振興型研究開発2013)によって行われました。関係各位に感謝致します。